

## 『啓示』

「俺は今日の午後九時二十八分に死ぬ」と彼は言った。

彼はわざわざ僕の職場に電話をかけてきてそう言ったのだ。俺は今日の午後九時二十八分に死ぬ、と。僕が工作中携帯の電源を切っているのを知っていて、わざわざ会社にまで電話をかけてきたのだ。

それについてどう反応すればいいのか僕には分からなかった。

「どうしてそれが分かるんだ？」と僕は受話器に向かって言った。

「さっき啓示を受けたんだ」と彼は言った。「ベッドの上で天井を見つめていたら、急にその考えが舞い降りてきた。そして俺の中に根を張ったんだ。深い根だ。そしてそれはまだ俺の中で息づいている。こんな感覚を得たのは初めてのことだ」

「それは確かなのか？」と僕は言った。そしてそう言いながら、上司が一体何の話をしているのか、と僕の方をちらちら見ているのに気付いた。あまり長話はできない。

「確かだ」と彼は言った。「それは地球が太陽のまわりを回っているのと同じくらい確かなことだ。そして今年のペナントレースで阪神タイガースが優勝しないのと同じくらい確かなことだ」

阪神の件は確実とは言えないような気がしたが——なにしろ選手たちは必死で頑張っているのだ——とにかく彼にとってその啓示は、それくらい確実なものだということだ。死がほぼ目前にまで迫っているのだ。

「今家にいるのか？」と僕は言った。

「そうだ」と彼は言った。「早く来てくれ。今日が俺の最後の日なんだ。会社なんかまっぼり出してここに来てくれよ」

「でも会社というのは、そんなに簡単に抜け出せないものなんだよ」と僕は言って、また上司の顔を見た。彼はまだ僕の方をちらちら覗き見していた。

「生きるか死ぬかの問題なんだ」と彼は言った。そしてこう付け加えた。「まあ俺の場合、もう『死ぬ』と決まってはいるんだが」

「分かったよ」と僕は言った。分かったよ。「なんとかしよう」

「そうこなくっちゃ」と彼はさも当然のこのように言った。

彼の部屋があるマンションは、僕の職場から電車を乗り継いで三十分ほどのところにあった。僕がそこに着いたのは、午後二時十五分だった。

「遅かったじゃないか」と玄関先で彼は言った。見ると、彼はまだパジャマ姿のままだった。

「ここに来るためにいろんな嘘をつかなきゃならなかった」と僕は靴を脱ぎながら言った。「僕の母親はまだぴんぴんしているのに、急に病気になった、ということになった」

「だって君の母親は東北にいるんだろう？」

「実の母なんだ、と言っておいた」と僕は首を振りながら言った。「彼女は東京で一人孤独に暮らしていて、急に病気になったのだと。本当はそんな人間存在しないのに」

「まあいずれにせよ」と彼は全然悪びれもせずに言った。「来てくれてうれしいよ」

僕はそこで彼から詳しい説明を聞いたのだが、結局聞かされたのは電話で話したのとほぼ同じ内容だった。

「だから啓示が訪れたんだ」と彼は言った。「お前は今日の午後九時二十八分に死ぬだろう、と」

「どうしてそんなにピンポイントで特定できるんだろう」と僕は言った。

「そんなこと俺には分からない」と彼は言った。「とにかくそれがメッセージだったんだ」

「ほかにメッセージらしきものはなかったのか？」

「あったよ」

「どんなもの？」

「それはね」と彼は言った。「今日の午後九時二十九分に宇宙が死ぬだろう、というものだ」

「宇宙が死ぬ？」と僕は驚いて訊き返した。

「そう」と彼は言った。「でもまあ俺には関係ない。だって俺はもうその一分前には死んでいるからな」

「ちょっと待ってくれよ」と僕は慌てて言った。「もし宇宙が死んだら、残された我々はどうなるんだ？」

「そんなこと知らんね。でもおそらく宇宙が死んだら、地球だって長くは持たない。とすると、君らもほどなく死ぬ、ということなんじゃないかな」

僕はそこで一度黙り込んだ。頭を少し整理しなければならない。宇宙が死ぬ？

「なあ」と少しして僕は言った。「前にもその啓示とやらはやって来たことがあるのか？」

彼は頭をぽりぽりと搔き、なんとか古い記憶を掘り起こそうとした。「ええっとね・・・」と彼は言った。「たぶんないと思う。これが初めてだ」

「それなのに」と僕は訊いた。「どうしてそれが『確かだ』と分かるんだ？」

「俺にはただ分かるんだよ」と彼は確信に満ちた顔で言った。「それはもう確実なことだ」

「それは一種の声なのか？」

「いや、声じゃない。どのような音声でもない」

「じゃあ何なんだ？」

「それはだね」と言って、彼はまっすぐ僕の間を見た。「物語だ」  
「物語？」  
「そう、物語だ」

## 『啓示の物語』

「それはこう始まるんだ」と彼はその物語を始めた。「まず最初に一人の若い男がいる。彼は大体二十五歳くらいで、自分は今日の午後九時三十分死ぬのだと思っている」

「彼は君なのか？」と僕は訊いた。

「いや、俺じゃない」と彼は言った。「少なくともまだ俺ではない」

「それで」と彼は続けた。「とにかくその男は、自分がその日の午後九時三十分死ぬと知っている。その理由は明らかにされていないんだが、それでも彼はその予感をほとんど確定されたものとして受け取っている。勘違いしないでほしいんだが、俺はなにも彼が自殺しようとしているとか、そういうことを言っているんじゃない。彼はただ事実として、その日自分が死ぬことを知っている、というだけなんだよ。

彼はその予感を朝目覚めたときに感じるんだが、それでもそのままいつも通り勤めている会社に向かう。実際ほとんど普段と変わった様子はない。ベッドから起きて、顔を洗って、髭を剃<sup>そ</sup>って、歯を磨いて、朝飯を食って、コーヒーを飲んで、テレビでくだらないニュースを見て、また歯を磨いて、そしてスーツに着替えて、部屋を出て行く。

通勤の満員電車の中で、彼はふとあの予感を思い出す。そしてしみじみと思うんだ。今日の夜に死ぬ、ということは、俺がこの満員電車に乗るのも最後なんだな、と。でもその事実によって彼が喜ぶことはない。ただ単にそう思った、というだけのことだ。

やがて彼はその電車を降り、都心のオフィス街をすたすたと自分の会社に向かって歩く。そしてそこに着くと、いつも通り仕事をするんだ。

はっきり言ってここまでは何のおもしろみもない。あの予感以外、普通と変わったことは何も起きていないわけだからな。もしこれがテレビドラマなら、ここでチャンネルを切り替えて野球中継を観ているところだ。でも俺には何か引っかけるところがあったんだ。だって人生最後の日なのに、どうして彼はこんな風に時間を無駄に過ごしてられるんだ？

その点が気になったから、俺はチャンネルを替えなかった。でも、相変わらず彼はいつも通りの日常を続けていた。彼はごく普通にパソコンで仕事をこなし(何の仕事なのか俺にはよく分らん)、上司のくだらないジョークに相槌<sup>あいづち</sup>を打ち(これがとことんくだらないんだ)、かかってきた電話の対応をする。見

ると、同僚の女性社員には結構可愛い子もいるんだが、彼は見向きもしない」  
彼はそこで一度話を中断し、僕に問いかけた。「なあ、この話の骨子が分かるかい？」

分かるわけない、と僕は言った。

「そうだよな。俺にも始めは分からなかった。だってそこでは何一つ起きないんだものな。でも俺は、彼が昼休みになって、近くのコンビニでおにぎり（鮭と梅干）を買って帰ってきたときに気付いた。こいつは生きてなんかいないんだと。いいかい？ つまり彼は歩く死体だったんだ。だからその日の夜死ぬ、という予感を得ても何も感じなかったんだよ。なぜなら彼はすでに死んでいたからだ。

それに気付いてしまうと、俺は、彼のまわりにあるほとんどのものがすでに死んでいることに気付いた。上司も、同僚の女の子も、歩く死体に過ぎなかった。掃除のおばさんだって死んでいた。パソコンも、電話も死んでいた。ビルそのものも死んでいた。

唯一例外だったのは動物たちだ。もちろん都会の真ん中だから、そもそも動物なんかあまりいないわけだが、それでもハトとカラスくらいならいた。そして彼らは生きていた。俺にはそれが分かった。彼らはきちんとした生きた目を持って、空から——あるいは電線から——真実の光景を眺めていた。彼らはちゃんと知ってたんだ、ここにいる人間たちは、ただの歩く死体に過ぎないのだと。

また勘違いしないでほしいんだが、なにも俺はこういう、会社に身を<sup>ささ</sup>捧げる生き方が悪いとかって言っているわけじゃない。だって世の中には会社だって必要なものな。そうじゃなくて俺が言いたいのは、その物語においては、ほぼすべての人間が死んでいた、ということなんだ。そのときの俺には見えなかったが、農家も、漁師も、学校の先生も、子供も、老人も、みんなが死んでいたんだ。生まれたばかりの赤ん坊だって死んでいた。俺にはそれを感じることができた。つまり、そこはそういう世界だったんだよ。歩く死体たちの世界だったんだ。

そのときただ一人、街に生きている人間が現れた。それは、君だった」

「僕だって？」と僕は驚いて言った。

「そうだ」と彼は言った。「君だ」

「ちょっと待って」と僕は言った。「そこまでは分かった。いや、本当は分かってなんかいないのかもしれないけど、とりあえず分かったことにする。でも一つ訊いておきたいんだが、『歩く死体』っていうのは、ちょっと矛盾していないか？」

「何が？」と彼は不思議そうに言った。

「だって歩いたらもう死体じゃないだろう」

彼はそれについてあらためて考えた。でも結局こう言っただけだった。「いや、全然矛盾してないよ」

「どうして？」

「うん、まあうまく説明はできないんだけどさ、とにかくそれは歩く死体だったんだ。動いてはいるが、何も見ていない。しゃべってはいるが、その言葉に中身はない。行動は、どこにも結びついていない」

「まあそう言われればなんとなく分かるよ」と僕は言った。

「そうだろ？」と彼は安心したように言った。

「それでだ」と彼は続けた。「そこにただ一人現れた生きた人間ってのが君だったんだ。君は、今ここにいる君とほぼ同じ姿をしていた。そして同じような歩き方をして、同じようにズボンのポケットに両手を突っ込んでいた。

君はあの男のいるオフィスに無断で入ってくると、彼をパソコンの前から連れ出した。彼の上司や同僚の女の子はじろじろと君を眺めたが、特に何も言わなかった。まあそれも無理はないよな。なにしろ彼らはただの死体に過ぎなかったわけだから。

そして君は彼の手を取ってその部屋を出て（その男は何の抵抗もせず従った）、ビルの屋上に向かったんだ。エレベーターの中で、君と彼とは対照的に見えた。君の目は生きていたが、彼の目は死んでいた。まあそういうことだよ。

そして屋上に着くと、空は青く晴れ渡っていた。それは実際のところ素晴らしい空だった。ところどころに薄い雲があったが、それだってかえって青空を際立たせるようなものでしかなかった。カラスが何羽か手すりに止まり、ハトがコンクリートの上で歩き回っていた。

君は何もしゃべらないまま、青年の手を取って手すりのところに行った。そこからは都会の情景が一望に見渡せた。そこより高いビルもいくつかあったが、大して数は多くなかった。下を見ると、狭い道路にたくさんの車が走っていて、人々はゴミみたいにしか見えなかった。気持ちのいい風が吹いていた。

君と彼はそうやってじっとしていたんだが、やがてどこからか——どこから来たのか俺には全然見えなかったんだが——一匹の猫が歩いて来た。それはごく普通の三毛猫で、ゆっくりと——本当にゆっくりと——そこを歩いていた。君らはその猫の歩みをじっと眺めていたんだが、猫はそんな視線にはお構いなしに、どんどん歩いていった。尻尾はピンと立っている。その猫は彼のすぐ脇を通り、そのまま手すりの隙間を通り抜けた。その先にはちょっと高いコンクリートの塀ふちみたいなものがあるだけで、ほかには何もない。ただ空気があるだけだ。

でも猫は臆した様子も見せず、そのまま先に進んだ。ひょいとジャンプして、その塀ふちの縁に立ったんだ。そして一度だけ君らの方を見て、そのまま下に飛び

降りた。

彼はさすがに驚いたようだった。今まで死んだような目をして、何を見ても驚かなかった彼が、だ。彼は手すりに手をかけて、下を見つめた。でももう猫がどこに行ったのかは見えなかった。あるいはすでに地面に落ちてぺしゃんこになっているのかもしれない。

彼の呼吸が荒くなるのが分かった。でも君はといえば、ものすごく冷静な顔をして、ただ上空を眺めていた。猫の行方なんか興味もない、という感じで。俺はそれを見てすごく驚いた。だって君は動物が好きだったからな。

でもそんなのはまだ序の口に過ぎなかった。俺はそんなことで驚いている場合ではなかったんだ。というのも、君は何食わぬ顔で手すりに手をかけると、それをひょいと飛び越え、その先のコンクリートの縁に立ち上がったからだ。君はそこから彼に手を差し伸べていた。まるで君も早く上<sup>のぼ</sup>ってこいよ、とでも言うみたいに。

彼はもちろん躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>した。一体誰がそんなところに立ちたいと思う？ でもそこで彼は思い出したようだった。俺は今日の午後九時三十分に死ぬのだ、と。だとしたら、今ここで屋上の縁に立つのを躊躇<sup>ふち</sup>してどうなる？ どうせ死ぬんじゃないか、と。彼は決心したらしかった。意を決して柵を乗り越え、そのすぐ先にあるコンクリートの塀の上によじ登った。そして下を見た。

そこには何もない空間が広がっているだけだった。隣のビルまではずいぶん距離があったし、しかもそれは君らがいるビルの半分の高さもなかった。上にはものすごく広い空が広がっていて、死んだ街を覆い尽くしていた。透明な風が彼のすぐ脇を吹き抜けていった。

君は彼が隣<sup>のぼ</sup>に上ってきたのを見ると、やがてその手を取り、迷いなく足を踏み出した。そう、空中に、だよ。それは飛び降りる、というよりは、ただ単純に足を前に踏み出す、という感じだった。まるでその先にまだ地面が続いているかのように。君がそこに足を踏み出すと、彼もまた道連れになって下に落ちていった」

彼はそこで突然話をやめ、何か飲みものはいらぬか、と訊いてきた。僕はそんなことよりも早く話の続きが聞きたかったのだが、それでも確かに喉が渇いていた。なんでもいい、と僕は言った。

彼は冷蔵庫からよく冷えた麦茶を取り出し、それを二つのグラスに注いだ。氷をいくつか入れ——それは静かな部屋にカラカラという音を立てた——お盆に載せて僕のいるテーブルに運んできた。彼はそれを一口飲むと——僕は一気に全部飲み干した——また話を続けた。

「それでだ」と彼は言った。「君たちはまっさかさまにビルの下に落ちていった。いかに君といえど——その世界で唯一生きている人間としての君といえど

——さすがに重力には逆らえないみたいだった。でも君は何一つ恐れず、堂々と真下に落ちていった。そこには何の後悔も、迷いもなかった。一方彼は目をつぶったまま、強く君の手を握っていた。それだけが彼の心の支えだったんだ。でも今彼は死のうとしていた。歩く死体が、本当に死のうとしていたんだ。どんどん地面は近づいてきた。目をつぶっていても気配でそれが分かった。もう本当にだめか、と思ったそのとき、どこかから猫の鳴き声が聞こえてきた。

彼ははっとして目を開けた。すると視線の先に、さっき落ちていった猫が飛んでいるのが見えた。そいつは今四本の足を広げ（ついでに尻尾も伸ばし）、全身に風を受けてまるでグライダーのように空を飛んでいた。そいつは言った。

「君。目をつぶっていちやあもつたいないよ。世界はこんなに美しいのに」

でも彼の目には、ただいつも通りの死んだ街が見えるだけだった。

「それはね」と猫は彼の心を読んだように言った。「君の目が死んでいるからだ。君の目が死んでいるからこそ、死んだものしか見えないんだ」

猫はそう言うと、やって来た風に乗って急に高度を増した。そこで青年もめいっぱい両手両足を広げて、風を全身に受けた。

すると一気に高度が増した。君と青年は、手を繫いだまま高い空に飛び上がっていったんだ。

それはとても気持ちの良い感覚だった。青年は、まるで生まれ変わったような気分を味わっていた。見ると、すぐ近くにまたさっきの猫がいた。

「なあ」と彼——おそらくオスだと思われるのだが——は言った。「知ってるか？ 三毛猫のオスが生まれる確率はおよそ三万分の一だそうさ。それで俺は結構ちやほやされて育った。自分が特別な存在なんだと思ったこともあった。でもね」と彼は言って青年を見た。「はっきり言って、特別じゃない奴なんてどこにもいないのさ。そのことに気付いていないだけでね」

彼らは死んだ街を通り越し、今海の上に出ていた。たくさんのカモメが、彼らのすぐ脇を通り過ぎていった。

「僕らはどこに向かっているんでしょう」と青年は訊いた。

「君は今日の午後九時三十分に死ぬんだろう」と猫は言った。「それなら時間のないところに行かなければならない」

「時間のないところ？」

「彼が知っているさ」と言って猫は君の方を見た。

君は分かっている、という風に猫に向けて頷くと、青年を連れてさらに高く飛び上がった。君らは大気圏を抜けて、やがて宇宙に出た。そして俺はそこで初めて気が付いたんだが、そこから見える太陽は黒くなり、今にも死にそうだった。そこで君がようやく口を開いた。

「太陽は今日の午後九時二十九分に死ぬ。そう決まっているんだ。それはもう、誰にも止められないことだ。それはもう五十億年くらい前から決まっていたこ

となんだ」

「じゃあ僕らはどうすればいいんです？」と主人公の青年は訊いた。

「どうしようもないさ」と君は言った。「でも一つだけ、生き残る可能性のある方法がある」

「どうやるんです？」と彼は訊いた。

「それはね」と君は言った。「太陽が死ぬ一分前に君自身が死ぬことだ。正確に言えば、生まれる前の君に戻るんだよ。そしてその状態で太陽の死をやり過ごす。先に死んでしまえば、太陽が爆発したところで——というのも太陽は最後に爆発することになっているから。そのとき宇宙も一緒に死ぬ——もう一度死ぬことはない。かつて誰かが言ったが、死者の特権はもう二度と死なないことにある。

そして君はその生まれる前の状態で、太陽と宇宙の死をやり過ごす。宇宙が死ぬと、そこに一瞬空白が生じる。君はその空白の中に生まれ変わればいい。そこで君が新たな宇宙になるんだ」

でもそんなことは、あまりに現実離れしていると彼には思えた。「本当にそんなことができるんですか？」と彼は訊いた。

「どうだろう」と君は言った。「でもほかに方法がないんだよ。君以外の人間はすでに死んでしまっている。君だってほとんど死にかけてはいたんだが、それでも完全に死んでいたわけではなかった。だからこそ今こうしてここにいられるんだよ。でもとにかく、さっき言ったやり方のほか、僕は方法を知らない」

「動物たちはどうなるんです？」

「彼らはもう十分生きたさ」と君は言った。「それに彼らは、運命を受け入れるのには慣れている」

「『生まれる前の姿』って一体何なんです？」と彼は訊いた。

「それはまあ」と君は言った。「一種の受精卵みたいなもんだ。でもそのままの受精卵、というわけでもない。まあ似たようなものだけど、いわば意識の受精卵だ。君はそこで原初の混沌に戻る」

「どうやってそんなことをやるんです？」

「これから月に行く」と君は言った。「そこでウサギさんに薬を調合してもらう」

そして君らは月へと飛んでいく。実は月もまた死んでいたんだが、そのことは別に青年を驚かせなかった。だってよく考えてみれば、月なんてただの岩の

かたまり塊で、生まれたときから死んでいたようなものだからな。月にはウサギと、さっき大気圏で別れた猫がいた。そこには小さな小屋のようなものがあって、どうやらそこがウサギの家であるようだった。彼らは外に置かれたデッキチェアに座り、そこで一杯やっていた。



「おお、来たか」と猫が言った。「一杯どうかね」。そして彼は青年にビールのジョッキを差し出した。

「いや、今のところは大丈夫です」と彼は言った。

君はウサギに言った。「ここにいるのが前に言っておいた彼です。彼のために薬を調合してもらえませんか？」

「〈逆戻りの薬〉」だな」とウサギは言った。彼は待っている、と言って後ろに引っ込んだ。と思うとすぐまた戻って来て、青年の鼻毛を一本引き抜いた。「薬に必要なんだよ」と彼は言った。

君らと猫は外で待っていたんだが、そこから見える地球もまた死にかけているように見えた。青年は言った。

「僕はいいとして、あなたたちはどうするんです？ だって太陽が爆発したら、みんな死んでしまうんでしょ」

「俺たちはいいんだ」と猫は言った。「君は君自身のことを考えていればよろしい」。そしてまたビールを飲んだ。

そこでウサギが戻ってきた。彼は片手に小さな瓶を持っていた。コルクで栓がしてあって、中には黒い液体が入っている。

「いいか」と彼は言った。「これを今日の午後九時二十七分に飲むんだ。それ以上早くても、遅くてもいけない。そうすれば君は一分後には受精卵に戻っているだろう。さらにその一分後に太陽が爆発する。その衝撃で宇宙そのものもまた死ぬわけだ。君は、そのあと世界に生まれた空白の中で、また分裂を始めればよろしい」

「でも」と彼は言った。「受精卵が太陽の爆発に耐えられるのでしょうか？ それは宇宙を殺すほどのエネルギーを持っているのでしょうか」

するとそこで君が言った。「それは大丈夫です。僕が君を守ります」

「あなたが？」

「ええ」と君は言った。「僕が身を挺<sup>てい</sup>して守ります。僕にだってそれくらいのエネルギーは残されている」

「でもそうしたらあなたは死んでしまうでしょう」と青年は言った。でも君は猫と同じことを言っただけだった。

「僕はいいんです。あなたはあなたのことを考えていればよろしい」

君らはそこで月を発<sup>た</sup>つと——猫はもう少しそこでビールを飲むと言った——青年の自宅へと帰った。時刻は午後の六時くらいになっていた。

「最後に何がしたい？」と君は彼に訊いた。

でも彼には何か特別なことを思いつくことができなかった。別に無欲だ、というわけでもなかったんだが、彼の頭に浮かぶのは、どれもつまらないことの

ように思えた。そこで結局、彼は近くのデパートで一番高いコーヒー豆を買ってきて、それをミネラルウォーターで淹<sup>い</sup>れて飲むことにした。それが彼の思い付ける最高の贅<sup>ぜい</sup>沢だったんだ」

そこで彼はまた話を急にやめると、ちょっと待っててくれ、と言って台所でガリガリとコーヒー豆を挽<sup>ひ</sup>き始めた。やがてこちらにまで良い香りが漂<sup>ひ</sup>ってきた。そしてさらにお湯を沸かす時間がかかり、数分後、二杯のコーヒーを持って戻ってきた。

「これが一番高いコーヒーだ」と彼は言った。

僕らは黙ったままそのコーヒーを飲んだ。確かに高いだけあって、とてもおいしかった。おそらくブルーマウンテンだろう。

「それで」と彼は話を続けた。「君ら二人は午後九時二十七分までそうやって一緒に時間を過ごしたあと、彼は二十八分にあのウサギからもらった薬を飲み、二十九分に太陽が爆発して、三十分に生まれ変わった。そしてそのとき気付いたんだ。この青年とは俺のことだったんだと」

僕はしばらく唾<sup>あぜん</sup>然として口も利けなかった。これまでの奇想天外な展開とは裏腹に、最後の一番重要な部分があつという間に終わってしまった。それに、物語の青年は自分ではない、と最初に言っていたではないか。そのことを指摘すると、彼はこう言った。

「だから言っただろう。最初の部分では俺はそのことに気付かなかった。でも一番最後に、彼が生まれ変わったところで気付いたんだ。ああ、これは俺のことだったんだ、と」

「でも君は会社で働いたことなんかないだろう」と僕は指摘した。彼は大学を中退してからというもの、ずっと裕福な親の仕送りで生活していた。

「まあな」と彼は言った。「でも細かいところはいいんだ。何もガチガチのリアリズムだけが真実ってわけじゃない」

僕はそこで黙り込んだ。これがつまり彼の受け取った「啓示」だったというわけだ。確かに一つの物語ではあったが、どちらかというはずいぶん稚拙<sup>ちせつ</sup>なもののように感じられた。特に後半部分が、だ。どうして猫がしゃべったり、空を飛んだり、それに月にウサギがいたりするのだ？ でもそのとき僕は、テーブルの上にあるものを発見した。それは小さな小瓶に入った黒い液体だった。「これはもしかして・・・」と僕は言った。

「ああ、これ？」と彼は言った。「これはただの風邪薬だよ。ずっと前にもらって、飲み忘れていたのを引っ張り出してきたんだ。近頃風邪気味だったからさ」。そう言うと彼は、その小瓶を宙に放り投げてはキャッチする、という動

作を繰り返し始めた。瓶は天井すれすれの高さにまで上がり、落ちてきた。また上がり、落ちてきた。それを見ていると、僕はなんだか落ち着かない気持ちになった。それで五回目くらいのところで、宙に浮いた小瓶を、自分の手でキャッチした。

「とにかくそれが君の『啓示』だったんだな」と僕はその小瓶を握り締めながら言った。

「そうだ」と彼は言った。「それを全部見終わったあとに、俺は確信したんだ。これは今日実際に起こることだと。つまり今日の午後九時二十八分に俺は死に、二十九分に宇宙が死ぬのだと」

「でももしそれが本当なら」と僕は言った。「たとえばNASAなんかですでに情報をキャッチしているはずじゃないか。太陽が死ぬのは、五十億年前から決まっていたことなんだろう？」

「NASAはきっとすべてを掴んでいるさ」と彼は言った。「だからこそ情報を漏らさないんだ。きっと今ごろ政府の要人なんかは核シェルターの中に逃げ込んでいるんだろう。でもそんなことしても無駄だ。だって宇宙そのものが死ぬんだ。シェルターなんか簡単に融けてしまうだろう」

「どうすれば生き延びられる？」と僕は訊いた。

「さっきの話を聞いただけだろう」と彼は、さもそれが当然のことであるかのように言った。「一度生まれる前の姿に戻って、また生まれ変わる。それしかない」

「どうやってそれをやるんだ？」と僕は訊いた。

「それを相談するために君を呼んだんじゃないか」と彼は言った。

僕は空の<sup>から</sup>カップを睨みながら考えていた。でももちろんなんにもいい考えは浮かばなかった。

「なにもかも気のせいってことはないのか？」と僕はあらためて訊いた。「君が見たのは全部ただの夢で、太陽は全然死にかけてなんかいなくなつて、その結果宇宙も死なないとしたら」

「その可能性はある」と彼は認めた。「でもね、はっきりいって宇宙は一度死んだ方がいいんだよ」

「死んだ方がいい？」

「そう」と彼は言った。「死んだ方がいいんだ。一度死んで生まれ変わるのが一番いいんだ」

「でもそれは君の主観的な願いだろう」と僕は言った。「それと実際に宇宙が死ぬかどうかは関係ないんじゃないのか？」

「関係あるさ」と彼は言った。「大いに関係ある」。彼はそこで口をつぐみ、じっと何かを考え込んでいたのだが、それがどのように「関係ある」のかは教え

てくれなかった。

「まあなんにせよ」とやがて彼はまた口を開いた「俺は宇宙が死ぬと確信しているし、それを望んでもいる。それはもうほぼ決まっていることだ。俺が君に相談したいのは、どうやって今日の午後九時二十八分に生まれる前の姿に戻るか、ってことなんだ」

「そんなの分からないよ」と僕は言った。

「大丈夫」と彼は言った。「まだ時間はある」

そのとき時刻は午後三時二十分だった。

我々は二人で知恵を出し合ったのだが、結局なんにもいい考えは浮かばなかった。彼は実際にビルから飛び降りることを提案したが、僕がそれを却下した。

「本当に死んでしまおうぜ」と僕は言った。

「いい案だと思ったんだけどな」と彼は言った。

一時間半後、結局僕らは疲れ果てて、ただぼおっとベランダにとまったカラスを見つめていた。カラスもまたこちらを見つめていたが、彼が真実を知っているのかどうかは分からなかった。外はもう夕方で、彼にとっての——あるいは我々すべてにとっての——最後の太陽が今落ちようとしていた。

「そうだ」とそこで何かを思いついたように彼が言った。

「なんだ？」と僕は言った。

「あの話の続きを書こう」

「あの話って？」と僕はまだぼんやりした頭で訊いた。

「啓示の物語だ」と彼は言った。

彼は、さっきあまりに簡単に終わってしまった二人の男の最後の場面を、詳しく書き直す必要がある、と言った。彼は台所のテーブルに愛用のマックブックを持ってきて、ワープロソフトを開いた。そして僕を見て言った。

「さあ」

「さあなんだよ」と僕は言った。

「詳しいところを考えてくれ」

「だって君の物語だろう」

「俺たちの物語だ」と彼は言った。「そして俺には文才がない」

「僕にもないね」

「大丈夫」と彼は言って、軽く僕の背中を叩いた。「君ならできる」

そして我々は————というか実質的には僕一人が———薄暮の中、カラスに見つめられて、その「啓示の物語」を書き進めることになった。正確に言えば肉付けをした、という方が近いのだが。

(『啓示』後篇に続く)